男、もとナチ親衛隊員！
女、ゲットーに収容された美少女！
二度と会ってはならぬはずの二人が出会ったとき
絶望的な愛欲の嵐が吹きすさぶ——
ダーク・ボガード
シャーロット・ランプリング
フィリップ・ルロワ
ガブリエル・フェルゼッティ
女流監督リリアーナ・カバーニ
撮影アルフィオ・コンティーニ
音楽ダニエレ・パリス
アメリカ映画／日本ヘラルド映画
Herald
愛の嵐
A Film by LILIANA CAVANI THE NIGHT PORTER
〈カラー作品〉
主題歌 ポニエ・エマ(エレック・レコード)オリジナル小説・発行 平安映「愛の嵐」

# ＊近日話題のロードショー

日比谷 みゆき座 (591) 5357

## 愛の嵐

THE NIGHT PORTER

〈カラー作品〉

アメリカ映画

日本ヘラルド映画 Herald

### 解説

ナチズムという狂気の嵐にもてあそばれ、そのあげくに悲劇的な結末を迎えなければならなかった男と女。苛烈な状況での彼らの運命の出会いと年月を隔てた偶然の再会、それにつづく狂気の愛欲の日々。その果てに招来される安らかな死の季節――耽美とデカダンな映像で描くヨーロッパ映画の秀作である。

古都ウィーンで数奇な運命の絆に結ばれた男と女。その愛の行為が、激しいタッチで描かれ観るものの官能を揺さぶる。

男マックスは元ナチスの親衛隊員。女ルチアはマックスのいたゲットーに収容されたユダヤ人の美少女だ。マックスは倒錯した性の嗜好の持ち主であり、ルチアはそうした彼の餌食になることで、どうやら生き永らえることができたようなものである。

映画は二人が10数年後、偶然ウィーンで再会するところから始まるが、二人のまわりに旧ナチ隊員や、暗い過去をもった男や女が登場し、そうした、さまざまな人間たちが、さいごの悲劇に向ってつき進んでいくさまが描かれる。宿命の男女におおいかぶさる死とエロスの峻烈なイメージ、さながらコクのある文学作品を読むごとき快感が残るはずだが、なんといっても話題を呼ぶのは主演の**シャーロット・ランプリング**演ずる愛欲シーンであろう。

望みなき愛と悦楽のはざまに女が垣間みたのは官能の究極にもたらされる静かな死の世界だったのだろうか。絶望的に男を犯し、己れをさいなんでいく……。

監督はイタリアの女流監督、**リリアーナ・カバーニ**。ルキノ・ビスコンティを思わせるタッチはこの女性の才能がなみなみならないものであることを示しているが、この作品の成功につづいて早くも次回作の準備に入っているという。

モーツアルトの「魔笛」をモチーフとする音楽構成はダニエレ・パリス。

（原題「夜警」／1時間57分／日本ヘラルド映画）

### 物語

ウィーンの冬は暗く寒い。

硬い石畳を突き刺してしまうほどの冷気が人間を締めつけている。

マックス（ダーク・ボガード）は今日もまたいつものようにアパートを出るとホテルへ向った。彼は夜勤のフロント係である。

その翳りのある表情は見るものに彼の過去を推しはからせたがくわしい過去を知っているものはごく少なかった。

その日かぎりでマックスのそれまでのひっそりした生活が終わりになるとは夢にも思わなかった。

ルチア（シャーロット・ランプリング）もまた同じだった。彼女は10数年前、ゲットーに収容された美少女で当時、エリートのマックスに倒錯した性の相手にされていたという屈辱の体験をもっていた。今はアメリカの音楽家の夫人である。

偶然の再会にほほをひきつらせる二人。

その二人がわけもわからず、また愛欲にふけるのにはそんなに時間がかからなかった。

一方、マックスは旧ナチ隊員が作っている秘密組織のメンバーでもあった。その組織は彼らの罪業を知る証人を闇から闇へ葬る秘密結社でもあった。つまりマックスは二重の裏切りをしたのである。

ルチアの存在を知った一味はマックスの身辺に捜索の手を伸ばすが、マックスはホテルをやめ、自分のアパートにルチアをかくまって絶望的な日々をすごすことになった。

狂ったように情欲にふける二人。

希望も出口もなく、二人の行方には死の世界しか見えなかった。やがて一味は露骨に攻撃をしかけてきた。

親衛隊の制服を身につけたルチア。二人は朝まだきウィーンの、ドナウの運河に車をすすめた。

つけたマックス。少女のワンピースを身につけたルチア。二人は朝まだきウィーンの、ドナウの運河に車をすすめた。

情死行である。

その時、背後から二発の銃声がひびいた。

二人は折り重なるように倒れる……。

### 死にいたるエロティシズムの陶酔

映画評論家　今野雄二

あのとき、このふたりには〈リリー・マルレーン〉さえも聞こえなかっただろう。小雨にけぶるウィーンの街でいま、会ってはならぬ宿命の男と女を結びつけるのはモーツアルトの調べ――エロスのきわみに、愛が蒼白い夜の炎の如くに燃えあがり、そして燃えつきていく……死にいたるエロティシズムの本質を女の眼でとらえ、女の魔性に托して鋭く描ききった、これは怖しいほどに魅惑の陶酔にあふれた作品!!